博士論文審査及び学力の確認の結果

審査委員（主査）　上村忠男

柳原孝敦氏の博士学位請求論文「ラテンアメリカ主義のレトリック」は、１９世紀後半から２０世紀前半にかけての時期の中南米諸地域には経済的・政治的優位を誇るアメリカ合衆国に対抗して文化的・精神的に優れた「われわれのアメリカ」＝「ラテンアメリカ」を称揚する「ラテンアメリカ主義」と称しうるイデオロギーの生成と展開が見られたという判断に立って、このイデオロギーの表出形態を何人かの文学者・知識人――コロンビアの作家ホセ・マリア・トーレス＝カイセード、キューバの詩人・思想家ホセ・マルティ、ウルグアイの批評家ホセ・エンリケ・ロドー、ニカラグワの詩人ルベン・ダリーオ、メキシコの作家アルフォンソ・レイエス、キューバの作家アレホ・カルペンティエール――の言説、とりわけ、かれらの言説をあやどっているレトリック＝喩法のうちに見届けるとともに、そのイデオロギーの問題性を同時代の政治的・文化的状況との関連においてあぶり出そうとしたものである。

審査には、学内では上村忠男（主査：学問論・思想史）、杉浦勉（ラテンアメリカ文学）、西谷修（フランス思想文化論）の３名が当たり、学外から今福龍太（札幌大学教授：文化人類学・ラテンアメリカ文化論）と野谷文昭（立教大学教授：ラテンアメリカ文学）の両名に参加を願った。論文についての各委員の評価は以下のとおりである。

まず、本論文が１９－２０世紀の中南米諸地域一帯における思想的展開の最も本質的な部分に迫り、そこに「ラテンアメリカ主義」なるひとつのイデオロギーの出現を見てとって、それの歴史的な意義を通時的な展望のもとで明らかにしようとした、日本で初めてのスケールの大きい独創的な研究であるとみる点では、審査委員の評価は一致した。また、本論文は柳原氏がこれまでに発表してきた何本かのモノグラフィックな論考を集成し、「ラテンアメリカ主義のレトリック」という一貫したテーマのもとに叙述し直したものであるが、各章を構成する論考のモノグラフィックな完成度にかんして、なかでも第５章「メキシコのウェルギリウス／ウェルギリウスのメキシコ――アルフォンソ・レィエスの位置――」にたいして上村委員から高い評価があたえられた。

ただ、それと同時に、上村委員や西谷委員からは、「イデオロギー」「レトリック」

「言説」といった本論文において鍵概念としての役割を演じている術語の用法に混同がみられるなど、考察に取りかかるにあたっての理論的な準備の面での不十分さが指摘された。西谷委員からは、さらに、１９世紀後半や２０世紀初頭の時代を論じるのについ最近のいかがわしい見解－－何でも「消費」に結びつけたがる「言説のバブリズム」－－に追従しすぎるきらいがある（たとえば１９世紀パリの「消費社会」を論じた箇所）との所感が寄せられたほか、ナショナリズムとラテンアメリカ主義とのパラレルな関係性ということがいわれながら、肝腎のナショナリズムについての規定がほとんどなされておらず、くわえてはベネディクト・アンダーソンの「クレオール・ナショナリズム」の見解が無批判に導入されている点について、「クリオーリョ」を論じようとするラテンアメリカ研究者としては軽率にすぎるのではないかとの厳しい指摘がなされた。

野谷委員からは、ジーン・フランコによって「アリエル主義」というように定義された中南米諸地域における知識人たちの「政治における敗北と文学における勝利」の立場を柳原氏が「ラテンアメリカ主義」というように規定し直し、両者の異同を丹念に分析しながら、ロドーのエッセー「アリエル」を中心に語られがちなこの思想をより広い歴史的連関のなかに位置づけて、ひとつの思想的な流れとして描き出すことに成功している点に高い評価があたえられた。また、「日本のラテンアメリカ研究者に見られがちな政治的バイアスがかかっていないため、論調に押し付けがましさがないのも好感が持てる」との所感が寄せられた。ただ、そのうえで、柳原氏がメキシコやベネズエラに滞在中に感知したはずの「内側からの眼」が本論文のなかでは活かされていないとの指摘がなされた。

一方、今福委員からは、２０世紀のラテンアメリカ知識人の生命が賭けられていた思惟の系譜を柳原氏が「ラテンアメリカ主義」という一個のたんなる「言説」の歴史として記述しきってしまっていることに疑義が提出された。20世紀のラテンアメリカの思想史とはまさしく西欧的「言説」による歴史的抑圧からの大いなる叛乱・誤読の試みとしてあったのではなかったのか、というのが今福委員の意見であった。さらに、「ラテンアメリカ」という仮構の枠組みがあるとして、それに学問的にかかわりながら矛盾を問い直してきたはずの筆者自身の実存や内的動機が論文の構造から捨象されている点に、論文の説得力の弱さがあると指摘された。

この今福委員の意見に関連しては、杉浦委員からも、本論文では「ラテンアメリカ主義」なるイデオロギーが言説として歴史的に存在してきたとの主張があたかも自明の前提のように語られ、この用語にたいする慎重な精査がないまま、「政治経済の米国／文化の

ラテンアメリカ」という二項対立の図式が終始一貫して反復されていること、当時のラテンアメリカ諸地域の知識人たちが緊密な相互的連携関係のもとにあったとは考えがたく、せいぜいが国家単位でしか考えることのできない文化実践の現実が、それぞれの言説間の差異を無視して、それらの単位を貫通する言説形成の過程として描き出されていることに疑問が呈された。杉浦委員からは、そのほか、「モデルニスモ」についての柳原氏の問題視点の安易さ・不用意さ（たとえばダリーオにかんして、ダンディズムやボヘミアンの問題から論じられ、プルーストとの差異などに触れられる一方で、「ニカラグワ人」である旧植民地人としてのダリーオの視線はまったく語られることがないことなど）、米国／キューバという複雑な諸関係のなかで政治アクティヴィストとしても比類なき活動を持続した、いわばグローバルな視野のもとにあっての「有機的知識人」マルティの活動にたいする柳原氏の認識不足、人種／エスニシティを政治化することによって成立しているカルペンティエールのキューバ文化論へ接近するにあたっての柳原氏における社会政治的な視角の欠如についての指摘があった。

審査委員会では、論文についての以上のような各委員の評価を踏まえて、６月２８日に最終試験（公開口頭試問）をおこなった。その結果、柳原氏の本論文は、基本的な概念枠組みの作り方や個々的な対象へのアプローチと解釈にかんして問題とすべき点があるものの、全体としては、原典資料についての緻密で周到な渉猟とテクスト批判の手続きをはじめとして、博士論文としての学術的水準には十分達しており、博士学位（文学）を授与するに値するとの結論にいたった。

ただし、本論文については柳原氏には近く公刊の計画があるようであるが、そのさいには、ミシェル・フーコーの言説理論やヘイドン・ホワイトの喩法論もさることながら、本論文ではどういうわけかとりあげられていないオクタビオ・パスの詩論・修辞学論あたりを足場として概念枠組みを設定し直し、対象も柳原氏が最も深く読み込んできているアルフォンソ・レィエスを軸にしたモノグラフィックな論考に書き改めたうえで公刊されんことを委員会としては要望させていただきたいとおもう。